

## プログラム18. JAEA KMS のQA 指針に関するブレインストーミングで出された意見

- 生産者によってデータの品質レベルが異なる可能性がある。KMS に適用されるQA システムは公開され、データソースによらず、こうした品質レベルを明確にして全般に適用されなければならない。
- 目的に応じて、使用される知識に必要とされる品質レベルを明確にする必要がある（例：セーフティケースにおいて使用される溶解度に対応した熱力学データの品質、熱力学データの品質だけが強調されるべきではない）。
- 大学では研究内容の創造性に力点が置かれるあまり、また設備や人的資源の制約などから、データなどの品質が必ずしも厳密に確認されない場合がある。大学のデータを使用する場合には、大学がデータの品質を評価できていることを確認する必要がある。
- 全データがそれぞれの用途に応じて最小限の基準に適合するよう、明確な手法と手順に基づいた基本的なレベルの品質を確保する必要がある。より高いレベルの品質が要求される場合もある。
- JAEA KMS の品質管理は、データソースの提供者ではなく最終的にJAEA の責任である。
- 意思決定の材料となるRMS 作成の各レベルにおいても、それぞれの意思決定やその要素の重要度に応じて品質を保証する必要がある。
- 作成されたモデルや解析用のソフトウェアツールの品質も確認する必要がある。
- 実際の運用にあたっては、組織全体にQA を広めようとする品質管理専門家と、QA の実施を担うメンバーの間の衝突が生じる可能性があり、目的や実行性を勘案した柔軟なQAシステムの構築が重要である。
- KMS の維持管理には、品質管理の責任について明確にしておくことが肝要である。
- 暗黙知（専門家に内在する知識）の利用をどう考えるべきか。暗黙知に品質レベルを厳格に実施することは困難。その知識がどう使われるかが最も重要。
- エキスパートシステムと暗黙知とのハイブリッドシステムによってQAを実施する方法が考えられる。このシステムを運用することによって、各種の決定はエキスパートシステムのコントロールシェルに記録され、その決定に関連する知識はエキスパートシステムの一部として取りこむことができる。
- 一般公衆（及びステークホルダー）とのコミュニケーションのためには、詳細な科学的知識よりも、暗黙知の方が重要かもしれない。このような暗黙知は対話の経験を積んだ専門家の中に蓄積されているものであり、これを分析することによってコミュニケーションのためのQA（コミュニケーションの進め方や説明ポイントの確認など）を考えることができるかも知れない。
- KMS を長期的に維持・管理することの問題に取り組むべき。この観点からも早い時

期からQAシステムを実装することが肝要。

- KMS をQA向上の観点から、どのように活用するか？KMS の一要素として、e-learning システムが考えられる（例：誤差の取扱い）。KMS は将来の、「品質の保証された」専門家を育成する助けとなり得る。